

山桜

あれを見よ 深山の桜咲きにけり

まごころ尽くせ 人知らずとも (作者不詳)

いつのころからか春が来るたびに山桜を撮りたい衝動に駆られる。そして、春が来るたびに山桜を探しシャッターを切るのだが、いまだ満足なものが撮れないでいる。

ソメイヨシノやシダレ桜も華やかで美しいが、開花と同時に柔らかな葉っぱを開く山桜のやさしさが私は好きなのだ。とくに霧や小雨にけむる溪谷の山桜は瑞々しく、深く私の心を癒す。

私たちの心には、ともすれば「自分は真剣に取り組んでいるのに、誰も分かってくれない」などという寂しさや怨念が棲みつく。私自身もそのような人間の一人で、今もときどきその陥穽に墮ちる。

そんな時、この歌は癒しの歌、励ましの歌となる。深い溪谷の桜は美しい花を咲かせても、人里離れたところに咲くゆえ誰からも認められず懸命に咲いているのではないか、あの山桜に学べと、この歌は励ましてくれる。

小中学校時代に長期にわたる執拗ないじめを受けたという生徒が、私に話した次のことを思い出す。彼はこのいじめられた体験を話した後、

「高校入学後はいじめを受けていない」と私に語った。「しかし、ボクは今も地獄で苦しんでいます」と言葉をつなぐ。今でも生々しい心の傷の核には、自分がダメな人間だからこんな目に遭ったのだという思いがある。長期間のいじめが彼の心をスタスタに引き裂き、自分が卑しく小さい人間としか思えなくなっていたのだった。

そうしてその傷が痛むたびに、「ぶっ殺してやる」などと復讐心が湧き起こることも彼を苦しめていた。私はいじめの後遺症の大きさに唾然としたのを思い出す。

私と出会ったころ、彼はこの傷を乗り越え人間関係の中で生き直す決意を固めていた。しかし傷を抱えたまま良い関係を作ることには彼にとって大変困難なことであった。なぜなら傷の癒えない間はどうしても目の前の人に身構えてしまうからである。そして、その苦労は誰にも分かってもらえない孤独な作業だった。高校生活の後半にその作業に取りかかった彼であったが、高校を卒業した今もその苦労は相変わらず続いているに違いない。

彼のことを思い出すとき、誰に知られずとも、深山の山桜のようにまごころを尽くし懸命に咲いてほしいと願わずにおれない私である。その苦労を誰かに知っていてほしい心は分かるが、人が知るか知らないかは問題ではない。人として生まれ人として花を咲かせるのは当たり前の権利なのだから……。

人間が出会う苦しみには二種類あるという。人に担ってもらえる苦しみと、自分の持ち分としての苦しみである。前の苦しみについては、人に甘え少しでも共に担ってもらうのが良い。しかし後者については、山桜のようにひっそりと自分が引き受ける覚悟がどうしても必要だ。これは残日がだんだん少なくなってきた私の想いである。

